

平成 30 年 3 月 10 日 (土)

信州ブランディング・フォーラム in 上田

「上田らしさ、信州らしさって？」

会場 犀の角

トークセッション参加者

郷土史家・民俗学者 益子 輝之 氏

上田図書館倶楽部 西入 幸代 氏

株式会社 間島宣伝事務所 代表 間島 賢一 氏

画家 白井 ゆみ枝 氏

上田映劇理事 竜野 秀一 氏

コーディネーター

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

コメンテーター

長野県参与 (信州総合ブランディング担当) 船木 成記

司会

信州ブランディング・フォーラム in 上田ということで、「まちなかで考える上田らしさ」という題でこれからフォーラムを開催します。

本日の総括のコメンテーターであります、長野県参与、総合ブランディング担当の船木です。

長野県参与 (信州総合ブランディング担当) 船木 成記

ブランディング・フォーラムの開催趣旨についてお話をさせていただきます。

ブランディングという言葉をご存知でしょうか。商品のブランドという言葉はわかりやすいんですけど、地域とか地名とかをブランディングするというのはどういうことなのか疑問に思われるんじゃないでしょうか。今日はそういうふうなことを一緒に考えていく、共有する機会にできればうれしいなあと思っています。

私はブランディング担当の県の参与という形で、去年の 4 月から、もうちょっとで 1 年になります。私自身は東京生まれの東京育ちで、長野県にはあんまりご縁がないまま過ごしてきました。長野と言えば、山があって高原があってというわかりやすいイメージしか持っていなかった人間であります。

ただ、47 都道府県で町づくり・地域づくりをお手伝いするというような経験をさせてい

ただいできました。地域ごとに特徴があって、それが外と比べてどう違うのか、相対化するという経験を持たせていただいています。ですから、長野県からブランディングについて手伝ってほしいと言われたことに関しては、他の地域や世界に対して長野の特徴的なこととかを伝えることが仕事かなというふうには、自分自身も感じるし、多分皆さんも思ってくださいなというふうには思うんです。

ですが、外に何かを伝えるためには、自分が何者かとか、中に何があるかということとちゃんとわかっていないと伝えられません。逆に中のことしか知らない人は、外にどう伝えるか相手のことがわからないと難しい。ということで、中も外も両方のことがわかっていないと、コミュニケーションが上手く取れないということになります。じゃあ船木は長野のことわかってんのか、そういうお声もたくさんいただくんだらうというふうには思っています。

そういうことで、ブランディング・フォーラムというのはブランディングの考え方を共有したいんだけど、外から見るとひとつに見える長野県でもエリアによって違いがあるということ、地域ごとに、どんな物語があって何を大切にしているんだらう、そういうようなことを皆さんから教えていただきたい。その地域で信じているものを預かって、世の中にお渡しをするということになるかなあと考えています。

このフォーラムはこれまで諏訪と飯田で開催していきました。諏訪では、諏訪湖と八ヶ岳を背景に持ちながら地域で活動されている方々のお話をうかがいました。飯田では、農ある暮らしや高校生の活動をうかがって、どちらかという人によったかたちのお話をたくさん聞かせていただきました。じゃあ上田はどうなんだらうということで、ご相談したのがあちらにいらっしゃる竜野さんです。では竜野さんお願いします。

上田映劇理事 竜野 秀一 氏

よろしく申し上げます。上田では、まちなかで考えようという活動を5~6年やってきました。まちなかの面白さ、豊かさを皆で考えようということをやってきたものですから、このような機会をいただいたときに、飯田が山なら上田はまち、というふうに考えました。上田では実行委員会形式で今日開催することになりました。全体で十数人いますが、長野大学や信州大学の学生さん、高校生も実行委員会に加えながら、ほぼ毎週集まって企画を練ってきました。

まちなかにどうしてこだわっているのかという今日の本題です。1583年に真田昌幸が上田城を築き、町割りがされてという戦国時代の流れがあったり、その後も時代を下るにつれていろんな主役が登場しながら町を動かしてきたと。そういう中であって、私の中では歴史と文化が地層のように積み重なってきているような気がするんですね。現代は若者たちが集まってきてくれて、かつてとは違う活気がまたあって、そういうところがまちなかについて面白いなということで、今日まちなかにフォーカスをあてた理由です。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

竜野さんは上田映劇の理事として今日お名前が出てるんですけども、皆さんもご存知の通り上田市職員でありまして、お仕事は中央公民館長をやられているんですが、今日は個人的な立場で参加されています。

続いては、本日のコーディネーターの吉澤さんにマイクをお渡ししてお話いただきます。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

「まちなかキャンパスうえだ」というところで働いています、吉澤茉帆と申します。今日は上田に住んでいる人がほとんど、ご出身の方だとちょっと減りますが、おそらく上田のことは私とか船木さんよりも断然詳しいという中で非常に恐縮ではあるんですけども、知らない立場だからこそ、あるいは外を経験してきたからこそ見られる、まちなかとか上田らしさということを皆さんと一緒に話していければ良いなと思っています。

皆さんにもご意見を出していただくワークショップの前段ということで、テーマを設けまして、具体的にまちなかつてこうだよなとか、私はこんなことをしているんだよみたいなことを情報提供させていただく時間を今から設けたいと思います。

さっそくなんですけど、よりディープなお話を竜野さんから、まちなかの歴史とか成り立ち、上田について時間軸を通して見てみようということをしてみたいと思います。

上田映劇理事 竜野 秀一 氏

さっき冒頭で、なぜまちなかにこだわるのかというお話をしたんですけど、だからまちなかにこだわっているんですよというところのご紹介をしたいと思います。

私は昨年で 100 年目をむかえた上田映劇、木造の古い映画館が現役でありまして、傷みが激しいもんですから、収益金で修復にあたっていこうという NPO を立ち上げて、その理事でございます。理事といってもお金を出すボランティアでして、決してお金をもらっていません。

まずまちなかの変遷を、地図を振り返りながら見たいと思います。皆さんのところには上田まち歩きの観光パンフレットをさし上げてありますが、その 4 ページにもあるんですけど。この下の部分に現在は上田駅があるんですけども、黒い線のところが北国街道ですね。これは大正の時の地図でございまして、この時にはすでに上田駅が南側にできておりますので、松尾町ができています。周辺には少し家があったんですけど、松尾町という通りを造るのに削りまして、その削りました土を現在の天神通りのところに盛り上げてまして、現在の 4 つの商店街の基礎がこのあたりで出来ていると。これは現在の地図でございまして。上田城が真ん中にあるということでございまして。

戦国時代とかは皆さん十分にご存知かと思いますが、真田の話は飛ばして、明治以降のお話をしていきます。明治 21 年にしなの鉄道が設置されてその時に駅が作られました。この景観については、もっと北の方に作る計画があったんですけども、桑畑とかがあった

りして、そこに蒸気機関車を走らせるのはどうなのかという反対がありまして、千曲川沿いに作られたと。それが人の流れを大きく変えていくということになりました。

それから大正以降になりますと主役が変わってきます。この地域も養蚕で栄えまして、蚕都とかつて言われたんですけど、そこで財をなした若者たちが自らのお金ですとか時間を使っていろんな活動を展開していきます。学びを深めたいという若者たちが中央の先生がたを自分たちでお金を出して呼んできて、上田自由大学というのを始めます。海野町のあたりにありました神職合議所で一番最初に行われたと。このまちなかでそういうことが行われたと。これは自由大学の講義風景なんですけれども。決して学歴があって大学生が学んでいる風景ではなくて、農家の若者たちなんですね。これも農家の皆さんの農閑期ということで、秋から冬という季節に行われたということです。

この時には映画の流行というようなこともあって、市内にはいろんな演芸場ができました。現在の映劇は1917年に出来て現在に至ると。一方で普通選挙運動というところにも若者たちは目を向けるようになります。それが信濃黎明会という普通選挙運動なんですけど、上田映劇の中に入ったことがある方はなんとなく同じだなってわかると思うんですけど、ステージのところで、尾崎行雄氏を呼んで行った講演の風景です。まさに、映劇があったからこそこういう講演会ができたということでございます。市立図書館とか、上田には近代的な建物がいくつか点在しているんですけど、この時に財をなした方たちが築いたり。こういった洋風建築が現在も残っています。

なぜ「まちなか」か。主役が交代しても人が集まる場所。それによって歴史的にも文化的にも重層化、あるいは多様な人々が集まれる場所がまちなかなんじゃないかなと思っています。主役として、戦国時代には真田氏であり、江戸時代には庶民。明治・大正には実業家であったり若者であったり。そして昭和の時代には非常に華やかな商店街がありまして、私なんかは田舎に住んでいましたので、「まちに行く」って言いながら、ハレの場所ということでございました。それが若干衰退していく中で、現在は新たな主役ということでNPOの皆さんや若者たちが新しいコミュニティスペースなんかを作ってくれて、そこに新しい人たちが集まるような場所になってきています。

私なりにこれからの「まちなか」を考えると、単なる住む場所・買い物する場所というだけでなく、そこに多層的にいろんな要素がありますので、それを見て回ったり、学んだり、いろんな体験ができる場所が「まちなか」なんじゃないかなということで、それを活用していったらどうかなと思っています。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

ありがとうございます。上田自由大学って、大正時代に最初に始まったんですか。

上田映劇理事 竜野 秀一 氏

そうですね、上田で始まって。民間で行われたのが10年くらいで、その後行政の方でや

ったんですけども、結局尻すぼみ的に終わってしまっただけで、ただここから発生して、それが県内・県外にその流れが行きまして、一番定着したのが飯田・下伊那とか松本の方で。飯田・下伊那は生涯学習の町と現在も言われていますけども、残念ながら上田ではそういった定着の仕方はしませんでした。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

一般的に明治の頃の情報とかは多いんですけど、大正時代の頃ってなんかエアポケットになっていて、まとまって教えてもらえたりとか、「モボ」とか「モガ」とか聞いたことがありますか。若干15年で短かったこともあるんでしょうけど、時代の転換点でもあったかなあと思います。そういう時に上田ではそういうことが起きたんだ、ということに改めて丁寧にお聞きをして、僕自身はすごく関心を持ってました。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

町を歩いていて面白ってよく若い人とか県外の人から聞くんですけど、町が拡大してきたとか、だんだんと主役が代わってきてってところが未だに見て取れるってところが一端なのかなってお聞きして感じました。

上田映劇理事 竜野 秀一 氏

そうですね。上田の町って通りをイメージするかもしれないんですけど、実は裏通りには江戸時代、戦国時代の武家屋敷や庶民の民家が残っていたり。やはり城下町って裏通りが面白いなって気がしますね。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

続いては西入さんにお話をうかがいます。西入さんは「データ」「資料」といったことに深く関わられていますので、そういった視点から見た時に上田とかまちづくりに対してどういったことが考えられるのか、ということをお話いただきます。

上田図書館倶楽部 西入 幸代 氏

皆様こんにちは。西入と申します。「データで見た上田」に入ります前に、私は「NPO上田図書館倶楽部」というところで活動していますので、少しそのお話をさせていただきます。上田図書館倶楽部は駅前にある上田情報ライブラリー、これは市立図書館ですね。ここで図書館の職員の方と一緒に、市民協働で図書館サービスを提供しています。コンサートや朗読会、パソコン教室、絵本講座、文学講座、図書館の中の喫茶も営業しています。平成16年に発足し、約14年目に入ります。図書館に関係した活動を続けてきまして、今日のテーマである、「まちなか」や「上田らしさ」を考えるうえで、図書館はかなり役に立つのではないかと思います。

図書館は長年にわたって、郷土資料などを収集しています。例えば海野町の歴史に関する地域資料を検索してみますと、東信史学会の「ちくま」という雑誌に、「上田海野町商人、土屋善右衛門とその一族について」なんていう論文が載っていたり、海野町の商店街が「海野町史」を発行していたり。最近ですと「海野町・原町ビックリ歴史散歩」なんていうブックレットが出されていたり、あげればきりがなほどの郷土資料を見つけることができます。こういうものは、先人による、まちなかや上田らしさの記録そのものではないかと思っています。このような資料はブランディングを進める上で参考になるのではないかと思いますし、ブランディングの厚みを増すための材料にもなるのではないかと思います。

図書館にはデータベースが入るようになってきました。信濃毎日新聞の記事検索をするデータベースで海野町の歴史に関する記事を検索しますと、これもまた非常にたくさんヒットします。蚕都上田の隆盛期を検証して、養蚕の道具を旧家から借りてきました、というような記事が出たりしますね。そうすると、記事というのは、その地域の皆さんが大事に思ったり、将来に伝えたいと思ったりして、行動を起こした記録だと思うんです。ですから、新聞記事というものを通して、町、それから上田らしさというもののヒントが得られるのではないかと思います。

図書館は本を借りるところというイメージが強かったと思うのですが、今はデジタル情報と活字情報をあわせて提供することができる、地域の情報拠点を目指しています。ですので、ブランディングのネタ、まちの物語のネタは、もしかすると地域の図書館に見つけることができることができるのかもしれないなと思っています。

次に、RESAS「地域経済分析システム」というものを使って、ほんの少しですが上田のことをお話したいと思います。このRESASというのは、少子高齢化に対応するために国が各自治体に対して、地方創生戦略を作りなさいという指示をしまして。ついてはその戦略は、夢物語にしないで、データに基づいて戦略を立ててくださいね、データは国で提供します、とって作られたシステムです。従来からある統計に加えて、民間のビッグデータの分析も足して、見える化したというものです。集計が自治体単位になっていますので、このまちに焦点を当てたデータを出すことはできないのですが、まちが存続する上田市の状況を、多少ですけどご覧いただきたいと思っています。

3点ほどお話いたします。これはネット上からどなたでもご覧いただけます。最初は観光についてです。上田市の観光スポットとって思い浮かべるところはどこでしょうか。上田城ですかね。ほんとに上田城でしょうか。実は、大河ドラマが放映されていたときには上田城だったんですが、その前は違ったんです。ナビタイムという路線検索アプリがあります。出発地と目的地を入力すると路線が出てくるというような。この出発地と目的地のビッグデータを分析して、国が買い上げてRESASが見えるようにしているんですが、上田市の目的地として、2014年の段階で一番検索数が多かったのは、なんと「美ヶ原高原美術館屋外展示場」でありました。上田城ではありませんでした。上田城は2番目です。2016

年になると、大河ドラマの影響で上田城になったんですね。これが現実でして、このまま過ぎていったときに、また美ヶ原高原美術館になってしまうのか、そうならないようにしたいという立場の方もおいでになるかと思いますが。ビッグデータというのは、思わぬ答えを出してくる。美ヶ原高原美術館というのは、ちょっとびっくりなところではないかと思います。でも現実を見るとこうである、ということの上で立ってものを考えていくこともあるかなと思います。

次に、人口の滞在率というものについてお話をしたいと思います。これはNTTドコモが提供している、空間モバイル統計を使っています。GPSの位置情報をビッグデータとして分析したものです。滞在している人口が国勢調査人口に対して上か下かということを表示しています。上田市の滞在人口の時間別推移を見ますと、昼も夜も集まる地域だということがおわかりいただけるのではないかと思います。参考までに千曲市のデータをご覧ください。千曲市では、夜は滞在人口率が国勢調査人口より高いんですが昼間になると下がるんです。特に平日下がる。どういうことかということ、千曲市の場合は人が出て行く、お仕事なのか学業なのかはわかりませんが、こういう違いが見られるんですね。そうすると、施策としても、あるいはイベントを行おうとした時にも、どういう時間帯がふさわしいのかというようなことの参考になっていくのではないかと思います。

では、人が集まる上田市の方が良いのかということ、切り口を変えるとそうとも言い切れない部分もあります。地域経済循環という視点から見ると、上田市は雇用者所得が地域外へ流出しています。つまり働きにみえて給料を持って違うところへお帰りになる。逆に千曲市は、雇用者所得が流入しています。こういうことを見ていくと、ひとつの自治体だけで、人が集まってくる上田市は良いわ、というような見方ではなく、もう少し広域に、行ったり来たりすることも含めて見たらどうか、というような視点が生まれてくるのではないかと思います。

3番目に、農業の構造を見てみたいと思います。長野市の品目別の農業産出額を見ると、果実が半分以上いくくらいになっていまして、長野市の特産品といたら果実で間違いないんだらうと思います。では上田市を見てみましょう。野菜がトップ、次が米、次が果実、次が花卉ですね。これをご覧になって、上田市の特産品は何と言えるでしょうか。難しいと思いますね。特産品がない、それは弱点なんではないでしょうか。もしかすると、域内でいろんなものを取り揃えることができるという強みではないか。つまり、地産地消をやりやすい地域なんではないかという捉え方も可能なのではないのでしょうか。

このように、RESASを使いますと、地域の現状が見えてきます。RESASには、人口、地域経済循環、産業構造、企業活動、観光、まちづくり、雇用／医療・福祉、地方財政、というようなマップがありまして、80メニューを超えるものになっています。例えば人口マップを見ますと、2レベル目がこういうふうに分かれていますし、人口構成とかね。また3レベル目に至るまでのメニューがありますんで、興味がおありになるところをちょっとご覧いただくと、夢物語ではないまちづくり、現実に即したまちづくりというようなものに

考えがいく可能性があるのではないかなと思っております。

RESAS は気付きの入口です。RESAS で全てが解決はいたしませんけども、上田ってこうなんだってということがわかりましたら、そこから何か発展していくのではないかなと思っております。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

RESAS というのは一時かなり話題になったので、耳にされた方も多いとは思うんですけど、私も 2 クリック目くらいまでやったことあるんですよ。でもわかなくなっちゃって閉じたことがあるんですけど、今日ようやくどんなことが見られるのかというのが垣間見れた気がして、もう 1 クリックしてみたいと思います。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

冒頭おっしゃっていた、図書館がすごく大事なところだよって話が重要なご指摘かなと思います。図書館って本を貸すところだけではないっていうふうに、ナレッジセンターって言い方をしたりもするんですけど。専門知を持っている人と、それを知りたかった人が出会う場所でもある。海外の図書館ってそういうのがあったりもするので、これまでの地域史の集積があり、それを引き出すというのが重要かなと思っています。RESAS も感心を持って、仮説を持ってみるといろんなものが見えてくるんですけど、ただ漫然といじっていると閉じてしまうということなので、疑問に思ったりしながら考えるということなんだろうと思います。西入さんのお話にあった特産品の捉え方ですとか、昼間人口・夜間人口の多い少ないには意味がなくて、見方によって意味が出てくるということですよ。町をどういつながりで見るかによって全然変わってくるんだと思うんです。そういう視点の開き方みたいなことを日常の中でもできると良いかなと思います。「気付きの入口です」とおっしゃったのはまさにそのことなのかなと思いますながらお聞きしました。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

関心を持たれた方もいるのではないかなと思いました。ビッグデータって大事らしいけど・・・みたいところから、図書館にも行こうかなとか、RESAS も開いてみようかなとか、思えたのではないのでしょうか。

上田図書館倶楽部 西入 幸代 氏

これまで 3 回ほど RESAS の勉強会を開いてきました。広報で周知を図ったりもしたんですけど、残念ながら市民の方のご参加っていうのはなくて。ご参加いただく方は自治体や商工会議所の職員の方がほとんどでした。ですけれども、ご要望があればどこでも RESAS の勉強会を開きますので、機会があればお声がけください。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

次は私の方から、「まちなかで今何が起きているか」というタイトルでお話をしていきたいと思います。

先ほど自己紹介の中で、「まちなかキャンパスうえだ」で働いているとお伝えしたんですけど、海野町通りの、市役所側のところにあります。市内に大学が4つありまして、菅平まで入れると5つあるんですけども、その大学が連携する拠点として一昨年の7月にオープンしました。1年と少しやってきて、学生と一緒にまち歩きをしてみたり、商店街の方々にお世話になったりというところで、改めて町に出勤し町で働いているというところで、気が付く、感じる場所があります。

私自身は松本のほうに実家がありまして、高校出てからは広島に10年間居て、その後山口県に1年間行って。高校の時には、あんなに日本が横に長いと思わなかったんですよ。行ってみたら意外に遠くって、しかも山口県なんて行っちゃったもんだから、本州の端まで極めてしまったみたい。ちょっと遠くなったなと気が付いて、帰ってきたのが4年前なんです。その時に「HanaLab」というコワーキングスペースで働いてまして。就職するときに、代表だった井上拓磨さんという方に東京で会いまして。「上田ね、なんでもできるから」とか言うんです。それを真に受けたわけじゃないんですけど、お話を聞いてみると、出身の県でもあるし、その時やっていた仕事が続けられそうだったので、帰ってきました。山口にいるときは県立大学というところにいたので、行政ってお堅い仕事っていう堅苦しさを感じていたので、上田に来てわりと小さな組織でやらせてもらって、ほんとになんでもできるかもしれないと思ったんです。それが上田の特徴として思っていて、それは何かなというところを、町中を含めて感じるの、人とのつながりがよくあるなど思っています。魅力的な方々がたくさんいるし、それをつなげたいっていう人や場所もあるなというのを感じています。実際この「犀の角」なんかまちなかであって、人とまちをつなげる場所だなあというふうに思います。犀の角で荒井さんともよく一緒にお仕事をさせていただくんですが、すごくまちとつながりを丁寧に作られる場所ですし、中身自体もすごく魅力的な場所ですので、荒井さんがここで何をされていて、まちにいるということをどう考えられているかということをお話いただければ。

犀の角 荒井 氏

犀の角は2年前の9月にオープンして、ゲストハウスは11月にオープンしました。劇場とゲストハウスと飲食スペース、2回・3回はレンタルスペースということで、ダンスをやる人たちとかNPO法人にスペースを借りてもらったりしています。地域の人とアーティストと旅行する人が出会える場所として活動しているところです。1年とちょっと経った実感としては、地域の方に認知していただいているという実感はあるんですけど、上田市の人との接点というのがこれからだなという感じは持っています。ただ企画をするときに、それこそまちなかの吉澤さんのところに行って相談をすると人を紹介してくれたりとか、

いろんなつながりがすごく出来やすいですね。竜野さんがやっている映劇の「映劇ジャーナル」に情報を載せていただいたりして。打ち合わせするにしても、すぐそこに吉澤さんがいたり、スタッフの方がいたりして、すぐ打ち合わせできることが町でやっていてメリットだなと思っています。すごい近いところにいろんな方がいるので、逆に面子が限られてしまうというふうを感じることもあるんですけど、それが上田の良さなんじゃないかなというふうに感じています。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

なんか適度な感じはしませんか。100%知り合いでやっているわけじゃないんだけど、知っている人も相当数いて、みたいな。

犀の角 荒井 氏

だいたいみんな知っているとか、聞いたことがある見たことがある人が結構多くて。良いのか悪いのかわからないですけど、活動するにはすごくやりやすいってところはあるのかなと思います。ただ、実感としては、私とか吉澤さんとか原さんとかの世代はなんとなくつながっているんですけど、上とか下の世代の方ってどうかっていうと、犀の角はまだそこまで、大学生の関わりはまちキャンほどじゃないし。落語とかやらせていただいて、上の方にも出ていただいたりとかして、少しずつ広がってはいますけど、まだまだ世代間の交流というのはこれからなのかなという感じはしています。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

荒井さんがお話くださった通りなんですけど、犀の角もこの2年の中でオープンしていますし、私が帰ってきたのも4年前なので、この4年間で見てもまちの中って結構開業された場所が多くて。例えばこのすぐ向かいの「リトルマチルダ」さんっていうカフェがあるんですけど、そこも2年ぐらいですし。そのちょっと先に「猫カフェ」というのがあります。そこはNPOで、猫の保護を目的にオープンしているんですけど、その代表さんは27歳とか28歳とか。それで2年ぐらいやっているのでも20代半ばで開業していたり。あるいは、トータスコーヒーさんも私と同じ年の方が店長さんなんで30代の方が。他にも若い人が開業しているお店がかなりあるというのが特徴です。そういう人たちがつながりを持っているんですね。ライバルではなくて良い関係を築いているような気がしていて、そういうところの中で私のいた HanaLab というのはつながる場所として役割を果たしていたんだなと感じていました。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

上田は学生さんが多いですね。学生の方が今日も手伝ってくれたり。長野のまちの中で学生さんが目立っている、特徴的な地域ってそんなにないような気がするんだけど、長

野で言えば上田は学生の町って言って良いのかしら。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

上田は人口でいうと、長野・松本に次ぐ3番目なんですけど、16万人という人口に対して大学が4つあるというのは、県内では恵まれている地域だと思います。信大の繊維学部と長野大学と上田女子短大、工科短期大学校があつて。菅平には筑波大学の実験センターもあるんですけど、そこで3000人ぐらい、もっていますね。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

その学生さんが背景にしながら「まちキャン」があるわけじゃないですか。そこでこの1年半ぐらいやっていて、まちとの出会いとか学生さんと一緒にこんなことができたとかあるんですか。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

まちキャンでは、海野町のお舟の天王を曳く時に学生のボランティアを募集して一緒に曳いたりとか。それをきっかけにして、まちの人に声をかけてもらって、地域のお祭りとかイベントだつていけば来るっていうようなこともあります。

国際交流をやりたいみたいな学生の方の希望から、いろんな国の留学生が来ているからその国の料理を振舞いたいんだみたいな希望と商店街をマッチングして、フードサミットというイベントの中で料理教室をやっていたり。そうすると学生が学生を呼んで、40人ぐらいのスタッフで、まちの人に対して、親子連れであるとかに対して、パキスタンの料理やベトナムの料理と一緒に作ったりしています。

ちっちゃいまち歩きからおっきいイベントまで、この1年2年でやっています。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

ここで竜野さんに聞きたいんです。町のひとつの機能としてまちキャンがあつて、吉澤さんたちの活動とか学生さんと町とのつながりなんていうのは、耳にしたりイベントで一緒になったりとかして、感じていることってありますか。

上田映劇理事 竜野 秀一 氏

今回の実行委員会もそうなんですけど、例えば長野大学があるよつて言つても住まいは塩田なんですよ。ただ水曜日の夜、まちキャンでやるよつて言つたら来るんですよ。電車代使つて、自分のお金を払つて来ているんですよ。別に会議の時だけに来ているんじゃないよつてしよつちゅう来て、彼らに新しいお店を紹介してもらつたり。まちキャンがベースに学生がつながっている。まちキャンにしかない情報があつたりするんですよ。そういうところで、ひとつの拠点になっているんだなあという気がしますね。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

昨日もしんきんホールでイベントをやりまして、そこに来てくださった方も今日いらっしやるんですね。その時は5大学から18団体の学生に発表していただいて、ほんとは大人とも会って欲しいというのが一番の狙いだったんですけど、70名ぐらい来てくださったんですよ。学生が半分で。そういう中で見ていると、最初は緊張しつつもプレゼン聞いたりするとかなり盛り上がっていたりしたので、良かったなあと思いますし、さらに町に広げられたら良いのになあとも感じます。

上田映劇理事 竜野 秀一 氏

やっぱりスペースではないんですね。吉澤さんがまちキャンがいるから、吉澤さんがいろんな情報を持っていたりネットワークを持っていたりするので、吉澤さんに会いに来るっていうかね。吉澤さんの役割ってすごく大きくて、まちキャンっていう建物があれば良いわけではないんですね。この犀の角にしても、荒井さんがいて人をつないでくれるんで、演劇の相談が出来たりですね。ここにはこの、まちキャンにはまちキャンの、HanaLabにはHanaLabならではの、それぞれ特化した情報があって人が集まっているという、コーディネーターの人たちの役割が非常に大きいなと思います。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

吉澤さんが「町に出勤して町で働く」って言ってたじゃないですか。まちなかかってかつては町の中で暮らしている人が多かったじゃないですか。その頃の上田と今のまちなかの状態というか、まちなかの関係みたいなのを西入さんにお聞きできたらと思うんですが。

上田図書館倶楽部 西入 幸代 氏

図書館で「信州地域史料アーカイブ」というデジタルアーカイブを作る仕事をしています。そうすると、先ほどの自由大学ですとか、上田市の非常に大きな歴史の記録として残っているというものがあまして、そういうものをデジタル化してきてはいます。

デジタル化する時に、古文書を読める先生方を挙げていくと、上田は非常に多いんですね。それだけ地域に根ざした研究者が多いんだと思うんです。他の地域でそれだけ現代訳ができる解説ができるという先生方を見つけるのは非常に大変なんです。そういう人材が非常に豊かにあるということを感じています。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

実行委員会のミーティングにご一緒してメンバーのお話を聞いていた時に、この後ワークショップを仕切ってくれる学生がおっしゃっていたんですけど、人とすごくつながりやすいというお話をしていました。つながる価値のある、魅力的な方と、そういう方たちを

つなげたい人がいるっていうね。つなげたいっていうところがすごく重要で、効率重視型の今の時代に、ある種おせっかいという言い方になるのかもしれないんですけど、一緒になったらすごく良いことが起きるかもしれないって思いながら、ご自身にはプラスなのかマイナスなのかわからないっていう中で、そういうことができるってことは両方の方のことを知らないといけないし、きっと良いことが起こるって思っていなかったらできないはずなんですよね。信頼関係も含めて、町の中にそういう事がまだ残っている地域なのかななんてことは、皆さんにお話を聞いていてすごく感じました。

それと町の記憶をちゃんとつないでいるんだっていうことの、リアリティみたいなもののお話がわかったかなと思いました。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

ここからはトーク 2 ということで後半戦まいりたいと思います。改めて 3 名の方に登壇いただきました。最初に益子さんから自己紹介をお願いします。

郷土史家・民俗学者 益子 輝之 氏

私も若いときはいろいろと選択肢の多かった人間で、大学時代は落語研究会を 1 年ばかり。卒論を出した先生が小さん師匠に話しをしてくれて、弟子に入っても良いよと言われたんですけどあれも苦労だと思ってやめまして。当時衆議院議員の奥さんが私の母と女学校が同級だったんで、市長をやらないかなんて話がありました。これをお断りしまして、結局市役所の観光課に入って。私を育ててくれた地元へ恩返しをしなきゃいけないから、少しでも市民のためになる活動をするために市役所に入ったなんていう気はまったくなく、一番楽をして金が入りそうだったから入った。最初は楽でしたよ。何も観光ないんだから。上田城に人が来るのはお花見の時期だけだからね。後は堀の鯉に餌でもやってりゃ良い。そしたら市町村合併で別所温泉が入ってきましたね。

上田というところは日常生活のしやすい土地なんです。日常生活を昔は「ケの日」と言ったんです。ケの日に対して特別な日を「ハレの日」と言った。ケの日っていうのはおだやかに静かに暮らしていれば良いわけです。それが幸せなわけです。ハレの日っていうのは少々いかがわしくても良いわけなんです。成人式の前に夜逃げしたって良いわけなんです、ハレの日は。そういうわけで、今非常に豊かな老後をおくっている、益子でございませう。

画家 白井 ゆみ枝 氏

旧真田町出身の白井ゆみ枝といいまして、絵を描いております。小学校 3 年の将来の夢で、絵描きになりたいと言ってから、多分 30 年間くらい、なんとかこれでやっていこうと思って、ちょっとだけやっていけているので、今はとてもありがたいな、うれしいなと思って生きています。

株式会社 間島宣伝事務所 代表 間島 賢一 氏

株式会社間島宣伝事務所の間島といいます。海野町の通りに事務所を置いて5年ぐらい、起業して、印刷物やホームページのデザインや企画の仕事をしています。結果的に海野町にいたので、様々な人との交流も深くなってまして、いっぱい知っている人が今日いるなあという感じなんですけれども、何かひとつでも記憶に残る話があればなと思ってますのでよろしくお願いします。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

それぞれの方がまちなかで活躍されている、活動されている方ということで、今日お話をお願いしています。具体的な活動のお話であるとか、その中で感じられていることをお話いただけますか。

郷土史家・民俗学者 益子 輝之 氏

年金生活者だから全然働いてないんだけど、どういうわけか役所の時からお祭りに関わってたんですよ。「上田わっしょい」って夏祭りね。後3年ぐらいで50周年になる。長野県で一番古いんです。ほんとは長野の方が1年先に始めてる。ところが長野は山崩れがあって1年休んでるんです。それで向こうは8月頭でしょ。上田は7月の末だから、こっちの方が50年になるのが1週間ばかり早いんです。あの頃は青年会議所ってのがものすごく活力がありましてね。それで何かお祭りを作らないといけないとなって。長野のびんずるの始まった動機とは上田はまったくの逆なんです。長野の場合は祇園が派手になりすぎた。金がかかりすぎる。それじゃ金のかからない市民祭りって言ってびんずるを立ち上げた。上田の場合には、大正時代に祇園祭りが復活するんですけど、これがだんだん廃れてきちゃったんです。それで市民にアンケートを取ったら一番多かったのが、祭りが欲しいという意見だった。それでわっしょいってお祭りをこしらえたんです。最初は伝統ある上田の祇園祭りに踊りをぶつけたわけですから、町中大騒ぎだった。それを全部、青年会議所の会員が論破して歩いたわけ。さっきちょっと学生さんの話が出たんですけど、上田っていうところは、上下関係が非常に薄いところ。だから若い人が活躍しようと思えば楽なんだ。歳いつているからって尊敬されるわけじゃありません。上田っていうのはそういうところ。長野なんか上下関係すごいですね。偉い方は偉い。上田っていうところはそういう差っていうのはほとんどない。名家3代続かずって言って、名家はすぐ没落すると言われてる。それが若い人にとっては活躍しやすいところだと思います。今のところ私が一番力を入れているのは、「上田睦」という神輿の連中の集まり。上田の粋というものをわずかに残しているのが、あの睦なんでね、そういうわけであそこに一番力を入れています。すごいんです私は、あっちこっちの顧問になって。科野大宮社の顧問でしょ、真田歌舞伎の顧問、他にも顧問がいっぱいある。それから上田睦も顧問なんです。普通は顧問での

は顧問料もらうんだけど、私はご祝儀配って歩いてるだけの顧問です。

画家 白井 ゆみ枝 氏

高校まではこちらで大学は東京の美術大学に行って、そのまま約 10 年、東京でフリーターをしながら絵を描いておりました。そういう中で出会ったお仕事で、バンドとかのプロモーションビデオの背景のお仕事をいただいたのがきっかけで、今年で解散しちゃうんだけど、チャットモンチーっていう若い女の子たちのデビュー曲の美術を頼まれたのがきっかけで、メンバーの高橋久美子ちゃんっていうドラムと作詞をしている子と一緒に、チャットモンチーとは別に久美子ちゃんが書く詩の世界に絵を付けて展示をして欲しいということで、2010 年から、東京・徳島・長野・愛媛の 4 箇所展示をしておりました。それが個人的に自分たちで会場を決めて展示をしよう、しかも入場料を取ろうということで、500 円なんですけど、当時チャットモンチーはすごい人気で久美子ちゃんは有名だったんですけど、私はアルバイトをしている身で、入場料を取って絵を見てもらうっていうのはびっくりするような状況だったんですけど、久美子ちゃんはプロとしてやってるんだし、プロとして 500 円取って、なんとか人を呼ぼうっていう展示をしました。それを東京で始めて、私の田舎の長野と、久美子ちゃんは愛媛の出身で徳島の大学なんですけど、自分の故郷で美術を見る機会が小さい頃なかったよねっていうのがお互いにあって、お互いの故郷でやろうと。徳島、愛媛にも 3 ヶ月くらい行って、向こうで展示をしていました。その最後が 2013 年に上田でやった「ヒトノユメ in 長野」ということで、駅前にある笠原工業さん。その時ちょうど国の重要文化財にもなった時なんですかね。そこの場所を借りて 1 ヶ月半展示をしました。私は東京からこっちに帰ってきて、ほとんど知り合いがいない状態で。会場探しから始めるんですけど、まず上田の町の中をとにかく歩きました。私にとっては高校時代の町ではあるんですけど、改めて歩くと始めて見るような場所、新たに自分の故郷を発見するような気持ちで歩く中で、蚕業でこの町が作られてきたんだって歴史も含めて、笠原工業さんの建物でやるのが良いんじゃないかということで、会長さんにかなり頼み込んで、すごくお安い値段で貸していただくことができました。それをやったのが 5 年前ですよ。ヒトノユメ展は 4 回目だったんですけど、結構ファンの方がいてくれて、絶対みんな上田の町に来てくれるはずだと。そうなった時に、上田の町って、1 日歩いたら十分町の中を堪能できるどころだなんて思いがあったので、町の中にも足を運んでもらうために、海野町商店街のショーウィンドウに詩を飾らせていただきました。なので、町の中をさらに展示の場として歩き回り、商店街の人とお話することでいろんな人に出会って、私ほとんど知り合いいなかったんですけど、ここにいらっしゃる方でもその時に出会った方がすごく多いんですけど、結構無茶なね、個人でやっているイベントとしては、数百万単位のお金をかけて、それをなんとか回収するためにも、人にも来て欲しい、上田の町も見て欲しいということで、めちゃくちゃいろんな人に助けってもらって、ひとつイベントをしました。それを見てくれた上田市の方にお話をいただいて、去年サントミューゼさんで

大きな美術展をやらせていただきました。それも自分たちが町の中でどんなふうに絵を見て欲しいとか、どんな展示ができるとかをやった成果というか、活動の成果がひとつの展示につながりました。私は上田の町の中でどんな表現ができるかなっていうのを考えながらずっとやってきました。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

実際まち歩きをするとすごく印象的なので、ついこないだまちキャンに、ヒトノユメの詩が書いてある場所のマップはありませんかって聞かれて。

画家 白井 ゆみ枝 氏

終わってからも、地元の上田高校の高校生に3年くらい経ってから、町の中になんか詩があるんだけどこれはなんだってインタビューされたことがあるんですよ。そういう意味でも展示面白いなと思って、知らないところでもそんなふうにつながっていくんだと思って。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

それが成果として作られたものなのかなと思ったら、案外取り掛かりの部分だったというのがすごく意外でした。

株式会社 間島宣伝事務所 代表 間島 賢一 氏

簡単に言うと、うちの会社は、何か事業を起こす時にものを売りたいとか、集客させたいというところで、デザインというとか何かカッコいいものを作るようなイメージがあるかもしれないんですけども、僕の考えはそうじゃなくて、そこから見えるものに対して心が動き、欲しいなとか行ってみたいなというものを演出することがデザインということで、効率悪い仕事なんですけども、僕の場合は一人ひとりとパーソナルに付き合っていくっていう感じです。その人の志だとか思いとかを聞いたり。だいたい思い強い人に限って表現が下手で伝わらないっていうパターンが多いんで、だからこそ僕の仕事が必要なのかなって。そうなってくると、自分がやれないことをやれる人に出会うことがとても多いです。一時期吉澤さんにも怖い人だって思われていた時期があったみたいで、僕から距離を置いていたんですけど、好き嫌いがはっきりしてます。やらない人大嫌いですが、何もしない人。でも何かやろうとしている人は大好きです。何かやろうとしている人に日々会うので、僕のインプットが多くなって。僕は「まちづくり」という言葉の意味がさっぱりわからなくて、僕自身もまちづくりをやってるなんて自覚が一切ないです。けども、こういう仕事をやっていることによって、人づくりということをやっているのかなって思うんです。例えば、こないだもアポなしで「漆塗りの職人やってるんですけど」って訪ねてきた人がいるんですよ。どうしたら良いですかみたいな感じで。わからないんですけど、パーソナルに

付き合いを深めていることで、頭の中に人材バンクがあるんですよ。この人紹介するあの人紹介するよっていう、おせっかい的な人格だと思ってるのね。もし上田らしさとかそういうことで言うと、こういったおせっかいなおっさんとかおばはんとか、そういう人たちが増えれば増えるほど、良いことになってくんじゃねえかなって、漠然と思っています。上田って確かに学生の町なんですよ。だからそのコミュニティの中の若者ってキーワードがすごく強くて。昨日も夜中 2 時まで地元の学生と飲んでたんですけど、そういうことが自然と日々あるんですよ。僕 40 代なんですけど、20 代の気持ちがわかるようになってきたりとか。40 代の古くから変わらない考えを教えてあげたりとか、お互いに大事なことを共有できて、仕事しつつプライベートも楽しく生きていけるのが上田だなあって思ってます。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

間島さんはどういう業種の方のお仕事をお手伝いする事が多いんですか。

株式会社 間島宣伝事務所 代表 間島 賢一 氏

もう様々です。その時代のムーブメントって言い方が正しいかわからないんだけど、僕 25 年ぐらいこの仕事やってるんで、なんか景気が良いとか言われてた時代あるじゃないですか。そういう頃は製造業の新商品発表とか、新シリーズ発表というカタログとかの仕事ばかりだったんですよ。けど今の時代になってくると、例えば NPO のお仕事とか、最近では福祉の関係の仕事。自然保育で子どもをこのように育てたいとか、お年寄りがいつまでも歩けるようにとかっていう事業をやってる方のお仕事がすごく多くなって、時代が何を求めているかっていうのが、受注内容で感じ取れるということがとても幸いだと思っていますね。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

仕事を通じて地域のいろんな方とつながりがあるんですね。

株式会社 間島宣伝事務所 代表 間島 賢一 氏

そうですね。だからスケールおっきい仕事は無理かもしれないです。やはり向こうにもパッションのあるところで、意見を言いながら仕事進めるのが楽しいですね。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

ご出身も上田ですよ。

株式会社 間島宣伝事務所 代表 間島 賢一 氏

そうです。ずーっと上田です。学歴も高校で終わりなので、会社勤めの時に、会社員の

給料で新幹線なんか乗れないんで、しばらくの間東京って未知でした。東京って駅降りたらみんなタレントなんじゃないかと思ってました。同年代は大学行ったりとか大きな会社に勤めたりとかしている中で、地元の小さな会社でずっと働いていたので、なんか悔しい思いはしてたんですけど、知らないうちにぐるり回ってローカルローカルっ最近言われるようになってきて、ラッキーって思ってます。俺のアイデンティティ半端じゃねえぞと。俺の時代がきたと今思っています。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

活動もパーソナリティもご経験も多様な 3 人で、お一人に聞いてもこの時間じゃ足りないくらいなんですけど。今のお話の中でも自然に上田らしさとかが垣間見えてすごい面白いなと思ったんですけど。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

上下の壁がそんなにないというのは腑に落ちた感がとてもあったなと思います。後粹ってなんだろうってのが気になっています。

郷土史家・民俗学者 益子 輝之 氏

粹って美意識は何かというと、一生懸命にならない、とことん究極まで煮詰めない、っていうのが粹なんです。だからこれが上田は昔から通ってる。ある意味では都会的なんですね。10 何年前かな、1 年間 SBC でテレビ番組持ってたんですよ。今ラジオだけなんです。すばらしきこの信州っていう番組で、長野県中の温泉を歩いた。そうするとね、長野県ほど“長野県”というひとつのつかみが出来ないところはないですね。中信・南信・東信・北信全部違う。静岡もそうですけどね、あそこは 3 つの国が一緒になったから。長野県の場合は北信濃、長野から向こう。新潟に近いんですかね。非常に純朴ですよ。よくいや純朴で悪くいや田舎もんだ。世に言う信州人のイメージって松本が中心じゃないですかね。教育熱心だとか理屈っぽいとかあれは松本のことだね。それから諏訪は、縄文時代が残っています。なぜかっていうと、御柱。あんな純粋なお祭りはないわけです。弥生時代になると、お祭りしてやるから豊作にしてくれよ、金を設けさせてくれよ。御柱はまったくその計算がないでしょう。命がけで丸太にまたがって、崖から落っこちて、宝くじが当たってもんじゃないんだ。あの純粋さは弥生時代じゃないですね。だから縄文のビーナスなんかが出てくるわけなんです。南信に行くとき変に明るいでしょ。長野県人なのかなんなのかわからないんです。長野県人が一番らしいのは信濃の国の歌唄ってるときだって。じゃあ東信は何かって都会的です。そん中で特に上田は都会的。なぜそんな都会的になったか。松平忠愛という殿様がいる。上田は真田で売ってますけど、真田はほんとわずかしかなかった。その後仙石って殿様が入って、3 代で出石に移されますわな。その後松平氏が入ってきて松平氏が一番長かったわけ。その上田の 2 代目になる忠愛という殿様がいるん

ですね。これがすごい殿様でしてね。江戸に居たときに吉原に通いすぎて隠居させられたという。その後を継いだ忠順という殿様のときに有名な百姓一揆が起きるんですけどもね。それによって、上田というところはものすごく江戸の文化を取り入れたと思う。江戸の文化の中心は吉原ですからね。私は忠愛が、上田に“まち”を導入したと思う。その伝統がずーっときて、明治になって蚕都といい。蚕都と言ったって、繭の出荷額から言ったら南信にはかなわない、中心の諏訪の方が一番多いわけですよ。ましてや隣には、富岡製糸を持つ上州があるわけです。じゃあ上田はなんで蚕都なのか。蚕に比重にあるんじゃないくて、都の方に比重がある。繭と米の取引所があったんです。日本で一番高い繭の値がついたのが上田だと言われたぐらい。町ですからそこへみんなが遊びに来るわけです。その度に繭を持ってくる。上州の人なんかみんな大八車へ繭を乗せて、鳥居峠を越えて上田へ運んでくる。なぜかってこの前評判の悪かった大河ドラマがありますけれども、あの時に出てきた楯取さんって方が県知事になるんですけども、非常に真面目な人で、群馬から遊郭を全廃しちゃった。だからみんな上田へ来た。上田の遊郭の水準はものすごく高かったそうです。この前遊郭のご主人のお孫さんって方にラジオでインタビューしたんですけど、地図なんかも見せてもらって。江戸の吉原そのままに作ってあります。昭和19年戦争が激しくなるとやめちゃうんですけど。その方は遊郭を作っただけじゃなくて、ヘルスセンターの前身も作ってるわけですよ。上田のお城の下に、電車の駅がありました。そこで降りた方がずっと北の方へ歩いて行って、男は遊郭へ行く、女性や子どもはその手前のヘルスセンターで遊んだ。東京に花やしきがあるっていうんで、花園という名前にした。今地名だけ残っています。芸者さんだけでも200人いたという時代があったんです。その時の粋という文化が上田に根付いて、池波正太郎先生が昭和40年にみえた時に、戦争で失った東京の戦前が上田には残ってたねっておっしゃった。それで上田を愛してくださいましたけどね。その粋という、一生懸命にならない、究極を探求しないということも残ったわけです。だから上田の商人の美德というものは、父親から引き継いだよりも店を大きくしないというのが、上田の商人の家訓だった。一生懸命に働かないのが美德だった。だから未だに上田は朝が遅くて夕方が早いというこの伝統はずーっと続いている。だって考えてみてください。どっかが大きくなればどっかが潰れるんです。おだやかに暮らすためには大きくなっちゃだめなんです。今あんまり競争をいろんなところでもって煽りすぎる。もし世界中の人が全部上田の商人の気持ちになったら、地球上から必ず戦争はなくなります。私は国連でこの演説をしたいと思っていたんですが、残念ながら英語がしゃべれない。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

商人の美德が文化的なところにもつながっているというお話を以前うかがったんですけど。

郷土史家・民俗学者 益子 輝之 氏

確かに上田の文化は高いです。今でも高いでしょうね。私の本職はお茶の師匠なんです。松本なんかはお茶が一般人に浸透しているわけ。だから10月にやりますお城の茶会なんていうと、それこそ普通の人みんな来て飲んでくわけ。上田の場合には、お茶の水準が高すぎちゃったんですね。どんどん水準が上がっちゃったから上田のお茶は先細りなんです。あらゆる意味で文化が高すぎる悲劇ってのもあるかもしれない。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

先ほど白井さんは、なかなか故郷で美術を見る機会がないって。

画家 白井 ゆみ枝 氏

私が高校の頃は町の中でいわゆる美術展みたいなものに出会うことは少なかったです。ただやっぱり町が面白かったんで、ほんとに古い建物が残っていたりとか、そういうものへの興味がすごいあったんですけど。そういうことを、高校の時に、自分よりも少し上の人たちが何かやっていたことになかなか遭遇できませんでした。今はSNSがあったりして、個人で発信できるっていうのがものすごく活動の幅を変えたと思うんですよ。ここ最近上田の中で複合的なスペースというか、飲食店だけちょっと片隅で何か展示ができるとか、そういうお店がすごい増えた気がしています。5年前にヒトノユメ展をやった時には感じていなくて、ここ2~3年じゃないですかね。この2~3年で若い人たちがいろんなことをやり始めて、しかも一箇所に行くといろんなことが起こるっていうのは田舎には重要だなんて思っていて。敷居がどんどん低くなっていくことを感じていて、自分の子どもの頃とは違う感じで町が面白くなっているなって感じています。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

昨年、「マチ×マチ フェスティバル」の中でも、まちを歩いてっていうイベントをされたりとか、これからもっていうことはあると思うんですけど、そのあたりの、町の中でアートをやるみたいなことを少しご紹介いただけますか。

画家 白井 ゆみ枝 氏

去年はじめて、いわゆる大きな美術館で展示をさせていただいて、作品に向かっていったんですけど、私の中では自分が今生活している場所で感じた空気みたいなものを私は作品にしているんだなって思った時に、やっぱり地元で作品展を開いて、会場に飾れてすごいうれしかったんですけど、それよりも、例えばまちを歩いていて、ああ面白いなって思ったらその場に展示をしたいなという思いがあります。その中で町の中の人たちがどんなふうに作品を感じてくれているとか、それを感じ取って作品を創るってすごい面白いなって思ったんですよ。町の中にはいっぱいヒントがあるなって思います。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

少し前に芥川賞を取った村田さんが、自分のお師匠さんから教わった言葉に、作家さんが書くのは、音楽で言うと楽譜を書くようなもの。読者さんが読んでくれて演奏してくれて始めて作品になるっていう話を聞いてね、アートとかって作り手が勝手に作っておくものじゃなくて、関係性の中でちゃんと意義を持っていくもんなんだって気が付きました。作り手はそうやって思ってるんだって。それと、お話を聞いていて、まちなかがキャンパスなんだねっていうのが思っただけ。かつそれは暮らしなんだ。人の暮らしがキャンパスになってるってことは、関係性の中で表現するってことだから、出来上がった世界を作り出すっていうことよりは、面白いなあと思いました。

画家 白井 ゆみ枝 氏

私もこの活動をしてから、展示をして人が見てくれて完成するんだって感覚を実感しました。それと、海野町は窓口もあるんですけど、商店街って個人商店の集まりじゃないですか。そういう感覚もわからずに行っちゃって、商店街の人に怒られたりとか、嫌そうな顔をされながら、しかもヒトノユメっていう、ちょっと宗教法人っぽい名前でも、結構不審がられて。でも私たちがやってることってそういうことなんだなって、すごいダイレクトにわかるっていうのは、勉強になったなあと思いますね。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

それでもあれだけの数のお店が協力してくださって、しかも 5 年間ずっと残されているっていうのはすごいですよね。

画家 白井 ゆみ枝 氏

ほんとにやった甲斐がありまして、すごい仲良くなれましたし、町のこともわかりましたし。やっぱり勉強の場だなって、改めて思いました。特に田舎の方って、私もそうなんですけど、会ってなんぼなんですよ。メールとか電話だけじゃなくて、会いに行ったら顔を見るの重要さを身を持ってわかりました。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

そういうところも含めて、上田って都会的だなって思います。有名だからすごいから、あの人の知り合いだからということで受け入れるのではなくて、会って話して良さそうだなと思えば受け入れるし、そういうことが自然に行われるっていうのは、納得感を深めているところでもあります。

間島さんは町で事務所をかまえられて気付かれたこととかありますか。

株式会社 間島宣伝事務所 代表 間島 賢一 氏

僕がよく話していることなんだけど、若いやつらと組むとね、さっき白井さんもおっしゃったけど、6~7年前にフェイスブックが日本で人気になってきたのかな。そういうふうになってきたからみんな言葉づくりがすごく上手で、素敵な言葉が飛び回ってるのね、世の中に。それがウソ・ホントって話じゃないんだけど、ちょっと違うなっていうものも、背景にあったりするものもあって。なんか気持ち悪いんですよね、最近。綺麗な言葉が飛び交っていて。だから若いやつらと話す時にあえて金の話をするんですよ。新卒で就職した時に給料いくら欲しいのとか。大金っていくらとか。そうやってお金の話をすると、悪人のように思われちゃうのね、田舎って特に。けど冷静に今日の日のことを考えて、まちづくりとか町のためにやってるところって、スケールで行ったらどこなのかなって思うと、上田の繊維業から発展していったモーターメーカーで、シナノケンシ株式会社が100周年を迎えるんですけどね。当時地元で1000人ぐらい雇用して、売上を大きく上げて、上田に本拠地を置いてるから上田に税金を落としてるんだよね。東御市で言えばミマキエンジニアリング。まちづくりってというか、町のためにやってるよなこの人たちって、つくづく思うの。フェイスブックだとどうしてもイベントの集約とかそういう表現で、この人たちがまちづくりしてるっていうふうになんか象徴されちゃって、インスパイアされちゃうんですけど。だけど冷静に考えてビジネス的に見ていくと、昔からの地元の企業って、町のために存在しているんだなってことを改めて気付かされたというか。若い人たちにお金を稼ごうっていうのも、稼ぐことによって税金を払うってことになって、それが町に使われたりするわけだから、いちいち僕はお金の話を人の前でするようにしています。

まちなかキャンパスうえだ 吉澤 茉帆 氏

言葉づくりってところは宣伝っていうお仕事のところでもすごく関係されていますよね。人の心を動かしたりとか。

株式会社 間島宣伝事務所 代表 間島 賢一 氏

例えば大きな資本を持っているところとか、例えば広告にお金をかけられるっていうのは、自分の仕事を否定するわけじゃないんだけど、人の心をいいようにコントロールできるんですよ。デザインとか広告って。だから良い方に振ればいいけど、悪い方に振れる、正直。なかなかそういった知識やノウハウがない、小さな個人事業の集まりが町なんで、どうしても大きなところに揺らいでしまうというか、そういった消費や人の行動であるなっているのは、仕事をしながら感じますね。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

竜野さん。レジェンド含め皆さんにお話を聞いていってどうですか。

上田映劇理事 竜野 秀一 氏

この町の中でお住まいになっている益子さんから、活動している白井さん。そして事務所を構えて、商店街の中でお仕事をされている間島さんのお話ということで、三者三様の方に来ていただきました。ありがとうございました。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

今日はずっと「まちなか」って言葉をお聞きしていて。大河ドラマの龍馬伝があった頃に長崎県と長崎市の観光を含めたお手伝いをしていました。あそこもまちなかがあるんですよ。長崎というと基本的にはまちなかのイメージしかないんですよ。実は山もあったりとか、こっちでいうと中山間地みたいなのところもたくさんあるんですけど、でもだいたい龍馬がいたところとか、グラバー園があってとか。町の中のことばかりがイメージの中心にあるんですよ。町と地域の接続みたいな話しが、長崎の経験をイメージしながらお聞きをしていました。まちなかって言葉はかつてはどこにもあったのかもしれないんですけど、江戸からつながってきて色濃く今でもつながっているよねと。池波先生が、戦前の気配がちゃんとあるよねっておっしゃっていたようなことも含めて、まちの記憶っていうのがちゃんとつながっているっていうのもすごく大事なことで、過去からの縦軸と今の横のつながりと、それを次にどうやって未来へつなげていくのかということが、さらに考えていくような話しになっていくのかなと思います。